

語の構成要素

——国語辞典における「造語成分」について——

山 下 喜 代

キーワード

造語成分, 結合形式, 和語, 漢語, 外来語

1. はじめに

一般に、語の構成要素すなわち形態素は、単独で語を構成できるかできないかによって、「自立形式」と「結合形式」とに分けられる。そして、自立形式か結合形式かにかかわらず、語において中核的意味を担う形態素を「語基」に、そして結合形式で、結合対象語基に形式的な意味をそえたり、合成語の品詞性を決定したりする形態素を「接辞」に分ける。しかし、形態・意味・造語における機能のいずれの点から見ても、これら語基と接辞を明確に分けることは容易なことではない。特に、語の意味を担う要素として、その意味が中核的か形式的かという点では、いくつかの段階が考えられ、それらは連続的な関係にあると言える。そこから、その中間的な要素としていわゆる「造語成分」とか「語素」というものを設定する考えが生まれる。「造語成分」という術語は、一般には「語の構成要素」となる成分すべてを示すが、ここでの意味はそれとは異なる。従って、この「造語成分」という術語を使うことの適否が問われるが、ひとまずここでは「 」付きで使用することにする。辞書においても、語の構成要素として接辞とともに「造語成分」の表示をするものが多く見られる。しかし、国語辞典が、先に述べたように、意味を担う要素という意味で語基と接辞との中間的な語構成要素として「造語成分」を設定しているのかとい

う点については、即断できない。それは、国語辞典に出現する「造語成分」の分析を通して、明らかにされ得るものである。

ところで、これまでの日本語における語構成研究は、複合語の研究が中心課題であった。そのために、複合語の構成要素である語基の性格や結合対象語基との関係が分析対象になることが多く、その場合、派生語を構成する接辞は、分析対象から除外されるのが普通である。しかし、接辞がどのように語構成要素として機能しているか、言い換えれば、どのように「造語」に参加しているかを明らかにすることは、現代日本語の語構成研究の上でも、さらに研究が進められるべき課題と言えよう。とは言うものの、接辞を分析対象とする時、先に述べたように、語基との境界が曖昧なこと、そしてその中間的な語構成要素として「造語成分」というものを設定する考えがあることなどから分かるように、分析対象である接辞そのものを認定することが難しいと言える。そこから、結合形式の形態素をすべて分析対象にするという考えが生まれる。つまりその結合形式には、いわゆる接辞と、国語辞典などで「造語成分」として扱われている形態素の一部、あるいはすべてが含まれることが予想される。

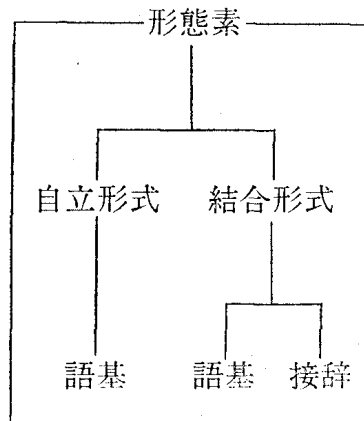
しかし、語の構成要素の中で、何を結合形式とし、また何を自立形式とするかということは、形態と意味の両面から考えても、そう簡単に片付けられる問題ではなさそうである。今後、この結合形式を対象に研究を進めて行きたいと考えているが、その一步として小稿では、「造語成分」を取り上げ、「国語辞典」を資料とした調査を通じて、その性格を明らかにし、語構成要素としての位置づけを試みたいと思う。しかし、「造語成分」の語構成要素としての性格を明らかにするためには、語基や接辞との異同が明確にされる必要があり、それは日本語の形態論全体に関わる大きな問題となる。現在、そのような大きな問題に答える用意はないが、語基や接辞あるいは「造語成分」といった日本語における形態素の性格を明らかにし、語基と接辞とに二分類されている語構成要素の枠組みを再考しようとする試みの中間報告として、小稿では国語辞典の調査結果をまとめてみた

と思う。それはこのような調査を、語構成の研究を形態と意味の両側面から進めていくための基礎作業と位置づけているからである。

2. 「造語成分」とは

先にも述べたように、語の構成要素(形態素)は、一般に下に示したように分類される。語基は単一語基と複合語基に分けられる。

「造語成分」の概念規定は不明確であり、この分類においてどのように位置づけられるか簡単には判断できない。まず、三種の国語辞典を例に、それらが「造語成分」をどのように定義して使用しているかを示すと以下のようなになる。



三省堂国語辞典 第4版 1992

- ① 複合語を構成する要素となる単語。例：「学級 / 委員」「委員 / 会」「すすり / あげる」などの、/ でくぎられたもの。
- ② 単語を構成する要素となる、それだけでは独立して使われないことば。接頭語・接尾語をふくむ。例：「不 / 健 / 全」「ほの / めく」などの、/ でくぎられたもの。造語要素。

▽この辞書では、単語と結びつく、接頭語・接尾語に近いものと約束する。例：「総 / 二階」「北極 / 星」などの「総」「星」。

新選国語辞典 第7版 小学館 1994

複合語をつくりあげる一つ一つの要素。「春風」「飛行機」の「春」

「風」「飛行」「機」など。

【参 考】 この辞典では、特に、それだけでは単語となることはできないが、単語の実質的な意味を表す成分となる言語単位のことをいう。「雨水」の「雨(あま)」「エターミナル」の「エア」など。

【新明解国語辞典 第4版 三省堂 1989】

その複合語を構成する、上位・下位の部分。例：「相互」における「相」と「互」など。【この辞書では、接頭語・接尾語より、実質的な意味を持っているものを指す。】

以上の記述から、国語辞典においては、「造語成分」を結合専用形式であるが、接辞に比べ、より実質的な意味を表すものである、という点から接辞と区別しているようである。しかし、実際にどのような語構成要素が「造語成分」として立項されているか、はたして「造語成分」は結合形式なのか、それらの点について語種別に調査したい。

3. 調査の対象と方法

「三省堂国語辞典第4版」を資料として、見出し語の中から「造語成分」として提示されているものをすべて抽出する。それらは、名詞などとして見出し語に出ているもので、結合用法として「造語成分」の表示のあるものも含んでいる。

こうして抽出された945の「造語成分」を分析の対象とする。これらを構成単位数から見ると、一単位のものと、二単位以上が結合したものがある。また、出自の点からも和語・漢語・外来語のものがあり、一例だけ「字音語基+助詞」の形態で出現する混種語としたものもある。ここで漢語というのは字音語を意味する。外来語のものには省略形も多数見られる。これらの例を示すと以下のようなになる。()内は語例。

【三省堂国語辞典の「造語成分」】

○和 語 荒^{あら}～(荒野) 小^こ～(小雨) 酒^{さか}～(酒壺) 船^{ふな}～(船火事)

金^{かな}～(金だらい) 長～(長電話) 若～(若奥様)
～あたり(今日あたり) ～で(使いで) ～かけ(書きかけ)
～敵^{がたき}(恋敵) ～がしら(出会いがしら) ～際^{ぎわ}(別れ際)

○漢語 快～(快記録) 強～(強ビタミン錠) 増～(増ページ)
脱～(脱工業化) 一昨～(一昨年度) 三連～(三連投)
～街(地下街) ～漢(熱血漢) ～員(会社員)
～以降(明治以降) ～有余(一年有余) ～未満(千円未満)

○外来語 タウン～(タウン情報) オート～(オートドア)
ハイ～(ハイジャンプ) プチ～(プチトマト)
メンズ～(メンズコーナー) ロシアン～(ロシアンバレエ)
～イズム(処世イズム) ～イヤー(オリンピックイヤー)
～サラ(安サラ) ～ジャン(革ジャン) ～ドラ(連ドラ)
～フィル(ベルリンフィル)

○混種語 ～分の(三分の二)

以上の例が示すように、これらの「造語成分」には様々な性格をもつものが混在している。これらを語種別に ① 出現語数と比率 ② 構成単位数 ③ 自立用法の有無 ④ 品詞性と結合対象語基との統語的關係などの観点から分析し、その性格を明らかにしたい。

4. 分析の結果

4-1 出現語数と比率

「三省堂国語辞典第4版」(以下、「三国」とする.)における945(異なり語数)の「造語成分」の語種別語数と比率を示したものが表1である。比較のために「角川国語辞典」(1969)(以下「角川」),「現代雑誌九十種」(1964)(以下「雑誌」),「新聞の語彙調査」(1972)(以下「新聞」)の調査結果

表 1 「造語成分」語種別の語数と比率

語 種	「三国」造語成分 語数と比率		「角川」 比率	雑誌 90 種 比率	「新聞」 比率
和 語	214	22.6%	37.1%	36.7%	16.4%
漢 語	613	64.9%	52.9%	47.5%	77.0%
外 来 語	117	12.4%	7.8%	9.8%	5.5%
混 種 語	1	0.1%	2.2%	6.0%	1.2%
総 数	945	100.0%	100.0%	100.0%	100.1% ¹⁾

を示した²⁾。「角川」は辞書の見出し語を対象としたものであるから、調査単位は辞書における出現形である。従って、その中には複合語なども多数含まれることになり、「三国」を資料として、形態素レベルの単位も含む「造語成分」を問題にしている本調査とは、調査単位において違いがある。「雑誌」は、雑誌に出現した語彙の調査で、 β 単位（一次結合までの複合語基を含む語基を一単位とするもの）を調査単位にしているので、やはり本調査とは異なる。「新聞」の調査も、短単位（ β 単位）が調査単位である。表 1 に示した結果は、15 音節以下の単語に相当する長単位を構成する語構成要素を語種別に示した比率である。

このようにそれぞれの調査は、調査対象や調査単位が異なるので、その結果を単純に比べることには問題もあるが、小稿のような「造語成分」の調査例がないため、これらの調査結果を比較の対象とした。

また先にも述べたように、本調査における対象は、語を構成する形態素が中心となるので、「語数」という言い方は正確ではないが、便宜上使う

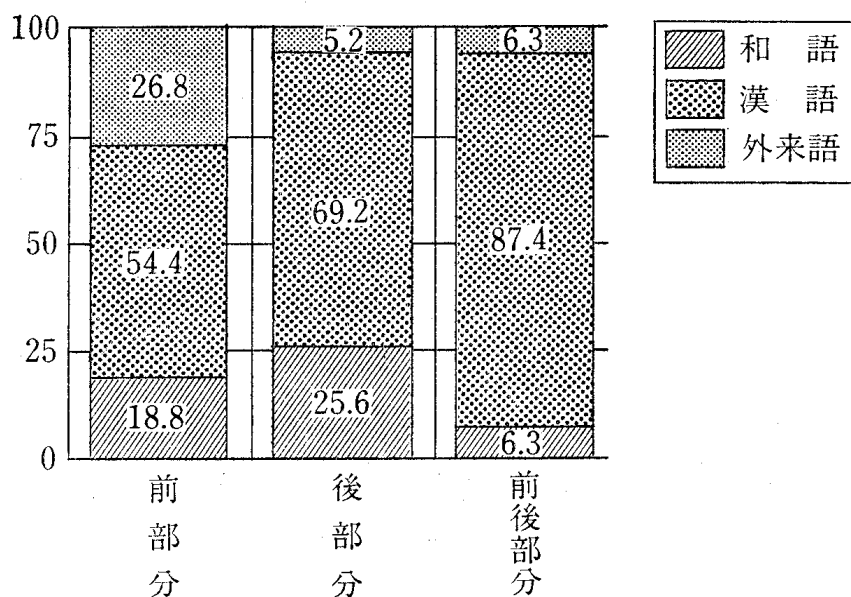
1) 合計が 100.1% になっているが、これは注 1) で示した「新聞の語彙調査」p. 12 の結果をそのまま引用したものである。

2) 「角川国語辞典」(1969) の調査結果は、さねとうけいしゅう (1973) p. 348 の表からの引用である。「現代雑誌九十種」(1964) の結果は、国立国語研究所『現代雑誌九十種の用語用字 III 分析』p. 61 の語種別異なり語数の結果である。また、「新聞の語彙調査」(1972) は、国立国語研究所『電子計算機による新聞の語彙調査 (III)』p. 12 の語種別語構成要素集計表の結果である。

表 2 結合の位置による「造語成分」の語数

語 種	「前」	「後」	「前後」
和 語	59	153	2
漢 語	171	414	28
外 来 語	84	31	2
計	314	598	32

図 1 結合位置による語種別比率



ことにする。

同じ「造語成分」でも「前部分」になるか、「後部分」になるか、という結合の位置によって表す意味が異なる場合があるので、分析においては、これらを分けて考える必要がある。表2は「三国」の「造語成分」を「前部分」「後部分」そして前後両方から結合する「前後部分」に分けて、語種別に異なり語数を示したものである。図1のグラフは、表2で示した結合位置による語種別語数がそれぞれの部分でどのような比率になるかを表している。

表1から「三国」と「新聞」と、そして「角川」と「雑誌」との調査結果が、ほぼ同じ傾向を示していることが分かる。前者は漢語の比率がか

なり高くなっており、その分和語の比率が下がっている。また混種語の比率が低く、「三国」においては極端である。「三国」「新聞」において漢語の比率が高いのは、特に結合力の強い「接辞性字音語基」³⁾が、語構成要素として多数出現することによると考えられる。

外来語は、「三国」の比率が特に高くなっている。「雑誌」と「角川」に比べ、「三国」に外来語の多いことは、年代の違いも大きいと思われる。「雑誌」においては、1950年代の雑誌が調査対象になっている。また「角川」は、1969年初版本が調査対象である。さねとうけいしゅう(1973)で、すでに国語辞典の見出し語において外来語が次第に増えていることが報告されている。また、野村雅昭(1984)では、新語辞典の60年版と80年版の比較において、外来語の占める割合が、43.1%から57.6%に増加していることが指摘されている⁴⁾。

「雑誌」と「角川」では20年近い隔たりがあるが、国語辞典には社会において定着していると認められてから収録されることが多いので、その時代の語彙をそのまま反映しているとは限らない。むしろ、新語は新聞や雑誌に早く登場する。従って「雑誌九十種」と「角川」の隔たりは、実際にはそれほど大きいものではなく、ほぼ同年代の語彙が出現していると考えてよいだろう。「雑誌」と「角川」における外来語の比率の差は、雑誌と国語辞典という調査対象の違いによるとと思われる。

先行研究の報告から見ても、90年代の国語辞典において外来語の比率が上がっていることは当然予想される結果である。しかし、ここで注目されるのは、「三国」における外来語が「造語成分」だという点である。新語辞典に多数収録されている一語基からなる単純語ではなく、造語単位とし

3) 野村雅昭(1979)において使われている術語で、「すでに存在する、和語・外来語の語基、および、字音複合語基、そして、それらの結合形に、前部分あるいは後部分から結合する、字音形態素」を指す。

4) 森田いずみ(1993)では、明治版・大正版・昭和版の国語辞典の外来語調査の結果について「新たに登録される外来語の数は時代が下がるにつれて増加し、「明治版」では、1140語の登録であったものが、「大正版」では2477語、「昭和版」では5054語とほぼ2倍強の勢いで増加している」ことが報告されている。

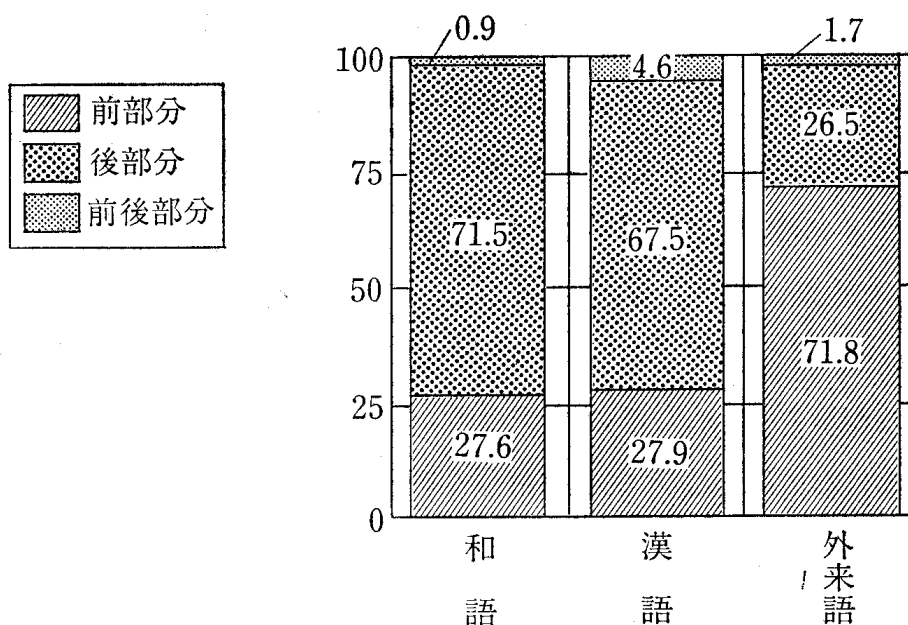
て日本語の語彙体系に深く根を下ろす「語構成要素」になっているという点である。図1で示したように「前部分」にくるものでは、26.8%を外来語が占め、和語をしのいでいるのである。同じく語構成要素を調査対象とした「新聞」における外来語の比率は、「三国」に比べかなり低い。しかし、「新聞」の調査報告(1972)においても、「総合雑誌の用語(後編)」調査(1958)の結果と比べ、語構成要素としても外来語が増えていることが予想できると述べられている⁵⁾。「新聞」調査からほぼ20年経て出版された「三国」の調査結果は、その予想通り、外来語が「語構成要素」として、日本語の語彙体系において力を発揮し続けていることを示していると言える。

「三国」の混種語は、先にも示したように「～分の」という形態である。これを「造語成分」とすることは、従来の「語」の枠組みからするとかなり問題がある。「～分の」が「造語成分」だとすると、例えば「三分の」が「語」になるのか。あるいは「三分の一」を一単位語とするのか。山下喜代(1993)では、日本語教科書の「接辞的漢語」(結合形式であることが、日本語教科書の中で明示されている漢語)には、形態的に多様なものがあり、一般には一単位形とは認めにくい特殊な複合形態の出現することを報告した。そしてそれは、「意味のまとまり」を重視して語の単位を決定する日本語教科書の姿勢を示すもので、日本語教育においてはそのような単位語の設定も有効であるとする考えを述べた⁶⁾。分数を表すときはいつも「～分の～」の形をとることを考えれば、このような複合形態を単位形として「造語成分」と考えることも言語使用の実態にかなっていると言えな

5) 「新聞の語彙調査(III)」p. 12の記述による。外来語が他の要素と連接(結合)する割合を調べた結果、「総合雑誌の用語(後編)」(1958)では、度数10以上は延べ36語、異なり19語で、助数詞としての用法が過半数を占めているのに対して、「新聞の語彙調査」では、延べ6295語、異なり244語で、助数詞は約16%である。このことから、「雑誌と新聞の違いはあるが、語構成要素としてもふえていくと予想できる」と述べられている。

6) 日本語教科書の中には、「～人分・～人前・～分間・～人兄弟」などの複合形態を一単位形として提出しているものがある。

図2 語種別結合位置の比率



いこともない。国語辞典においても、どのような単位形を見出し語として立項するかという点は、既成の言語単位にとらわれず考える必要があると言えよう。

図1で示したように、「前部分」「後部分」「前後部分」になるものはすべて漢語の占める割合が大きい。特に「前後部分」になるものは、漢語が圧倒的に多く、漢語の結合力の強さを示している。「後部分」ではその占める割合は、漢語>和語>外来語の順になっている。この結果は、表1の「角川」「雑誌」の結果とも一致する。しかし先にも指摘したように、「前部分」に関しては、漢語>外来語>和語の順で、和語と外来語が逆転する。

図2は、語種ごとに「前部分」と「後部分」になる「造語成分」の比率を示したものであるが、和語と漢語は前後の比率がほとんど等しい。これに対し、外来語は正反対の結果を示している。この結果については、その品詞性や結合対象語基との統語的關係などから検討してみる必要がある。その点については後述する。

4-2 構成単位数

ここで言う構成単位とは、現代語として意味を担っている最小の言語単位のことを指す。漢語は漢字一字一字を一単位とした。「造語成分」をその構成単位数から見ると、945の「造語成分」のうち、一単位からなるものが882(93.3%)で圧倒的に多い。しかし、二単位以上の「造語成分」も63ある。以下にその全数を語例とともに示した。

和語	一つ～(ひとつ事) ～しらず(恩知らず) ～そこのけ(先生そこのけ) ～そのまま(おとうさんそのまま) ～そのもの(真面目そのもの) ～つ方(末つ方)
漢語	一大～(一大決心) 一両～(一両日) 一昨～(一昨年度) 再々～(再々引き下げ) 再来～(再来期) 三大～(三大会社) 三連～(三連勝) 四半～(四半音) 次次～(次次号) 十数～(十数人) 準準～(準準決勝) 先先～(先先月) 前前～(前前日) 中高～(中高年) 中小～(中小企業) 二大～(二大政党) 馬鹿～(ばか高い) 保冷～(保冷車) 万年～(万年課長) 毛細～(毛細根) 翌翌～(翌翌日) 来来～(来来期) 両三～(両三度) 連邦～(連邦政府) 一昨昨～(一昨昨年) 二酸化～(二酸化炭素) ～以遠(京都以遠) ～以下(千円以下) ～以外(私以外) ～以後(八時以後外出禁止) ～以降(明治以降) ～以上(百以上) ～以西(小田原以西) ～以前(奈良期以前) ～以東(小田原以東) ～以内(十日以内) ～以南(小笠原以南) ～以北(仙台以北) ～監部(幕僚監部) ～気味(太り気味) ～工学(機械工学) ～居士(慎重居士) ～三昧(読書三昧) ～自身(わたし自身) ～自体(質問自体がおかしい) ～周忌(一周忌) ～周年(三周年) ～層楼(五層楼) ～同士(女同士) ～年生(六年生) ～風情(わたし風情) ～坊主(一年坊主) ～未満(千円未満) ～無比(当代無比) ～文字(しゃもじ) ～有余(一年有余)
混種語	～分の(三分の二)

63の内訳は、和語6、漢語56、混種語1で漢語が多い。外来語はすべて一単位である。和語の「～おさめる」「～はぐれる」などの「る」は、形態素レベルではそれだけで一単位とすべきであろうが、ここでは分節せずに全体で一単位としている。しかし「～しらず」の「ず」は一単位としたので、全体では二単位になる。また、外来語では、「アメリカン (Ameri-

can)」の「～an」は、英語においては「接尾辞」であるが、ここでは一単位とせずに「アメリカン」全体で一単位扱いにしている。

結合位置から見ると、「前部分」になるものは27語で、和語1、漢語26である。「後部分」は36語で、和語5、漢語30、混種語1である。これらを品詞性や結合対象語基との関係から分析すると特徴が見られる。この点に関しても後に述べることにする。先にも触れたように、「造語成分」の明確な定義がないことから、何を「造語成分」として辞書の見出し語に立項するかという点では、辞書によってかなり揺れが生じることになる。特

表3 国語辞典の品詞表示

造 語 成 分	三省堂	集英社	小学館	新明解
～以上(イジョウ)	造語	造語	名詞	造語
～以下(イカ)	造語	造語	造語	造語
～以内(イナイ)	造語	造語	造語	造語
～以外(イガイ)	造語	造語	名詞	造語
～以前(イゼン)	造語	造語	名詞	接尾語的
～以後(イゴ)	造語	造語	名詞	接尾語的
～以降(イコウ)	造語	造語	名詞	名詞
～以遠(イエン)	造語	造語	名詞	造語
～以東(イトウ)	造語	造語	造語	/
～以西(イセイ)	造語	造語	造語	/
～以南(イナン)	造語	造語	造語	/
～以北(イホク)	造語	造語	造語	/
～知らず(シラズ)	造語	連語	/	造語
～そのけ	造語	連語	名詞	接尾語的
～そのまま	造語	副詞	連語	副詞
～そのもの	造語	接尾語的	接尾語的	接尾語的
～つ方(ツカタ)	造語	造語	/	造語
～分の(ブンノ)	造語	/	/	/
一大～(イチダイ)	造語	造語	造語	造語
一両～(イチリョウ)	造語	造語	造語	造語
一昨～(イツサク)	造語	造語	造語	造語
一昨昨～(イツサクサク)	造語	/	/	造語
一つ～(ヒトツ)	造語	造語	名詞	名詞

に、このような二単位以上の「造語成分」は、辞書によってその品詞性の表示に違いが見られる。表3は、先に示した二単位以上の「造語成分」が、国語辞典においてどのように品詞表示されているかを示したものである。

ア行に出現した漢語 16 語と、和語混種語の全数 7 語の計 23 語について、その結果を示した。

調査対象とした国語辞典は以下のとおりである。

[三省堂]	国語辞典第4版	1992
[集英社]	国語辞典	1993
[小学館]	新選国語辞典第7版	1994
[新明解]	新明解国語辞典第4版三省堂	1989

「造語」は「造語成分」を表し、/はその辞書に出現しないことを表す。

「造語成分」であるということが、「名詞」「副詞」といった品詞についての情報や、「連語」であるという情報と同じレベルで扱うべきことなのかという疑問を感じるが、いわゆる品詞情報の項目においては、表3に示したような表示がなされている。

例えば、「～そこのけ」は4種とも表示が異なっている。またこれらいくつかの国語辞典では、「接尾語(接頭語)」と「接尾語的(接頭語的)」の表示を使い分けている。つまりそれらの辞書においては、語構成要素が「一般的な単語(自立形式の語基)」「造語成分」「接辞的(接頭語的・接尾語的)なもの」「接辞(接頭語・接尾語)」の4段階に分かれていることになる。しかし、その違いは判然としない。

4-3 自立用法の有無

「三国」における「造語成分」を名詞などの自立語としての用法があるかどうかで二分した。表4は、自立用法のある「成分」とない「成分」の語数と比率を語種別に示したものである。語数は異なり語数である。

2.「造語成分」とはにおいて、国語辞典の記述から「造語成分」を「結合形式」とすると仮定した。しかし、自立語としての用法のあるものが、語種別に見てもそれぞれ40%前後ある。意味の面から、これらが自立用

表 4 「造語成分」の自立用法の有無

語 種	「有」 語数と比率		「無」 語数と比率		合計の語数と比率	
和 語	81	37.9%	133	62.1%	214	100.0%
漢 語	278	45.4%	335	54.6%	613	100.0%
外 来 語	50	42.7%	67	57.3%	117	100.0%
混 種 語	0	0	1	100.0%	1	100.0%

法の意味とどれほど相違するかということ、個別に見ていく必要がある。意味的相違ということでは、自立用法のある「造語成分」は、自立語として用いられる時の意味をかなり強く残していることが予想される。

しかし、それも個々の「造語成分」によって自立用法との意味の差には段階がありそうである⁷⁾。また、「造語成分」として造語にかかわる時のみ有する意味というものも考えられる⁸⁾。

一方、自立用法の無い「造語成分」は、真に結合形式と言えるものであり、接辞との差異が問題になる。しかし、漢語においては、大部分の結合専用語基が明確な意味を表しているという点から見ても、「造語成分」の自立性の有無と、意味を担う形態素としての働きの強弱、つまり語として意味を明確に表しているということは、別の問題として考えなければならない。従って、それらは語種別に、さらには「造語成分」ごとに個別に検討していく必要があると言える。

また形態の面から言うと、語種によっては、自立用法の有無によりかな

7) 森田良行(1978)では、複合動詞の構成要素である動詞を、意味の度合いから見て五段階に分類し、例を示している。その中では、「複合するどちらか一方の動詞が本義から離れて転義的に用いられているもの」「それ自体独立した動詞としては用いられないが、複合動詞の中で生き残り、実質的意味を残している動詞的造語成分」「抽象化が進み、実質的意味を失い、形式化してしまったもの」などの段階を認めている。

8) 斎藤倫明(1984)では、「『動詞+動詞』形式の複合動詞の構成要素において、(接辞ではなく)語基でありながら、構成要素独自の、単独用法には見られない意味を有しているものが存在する。」として、それを「自由形式(自立形式)の語基と接辞との間のもの」と位置づけている。

り際立った特徴が見られる。

表4によると、自立用法のない比率は漢語<外来語<和語の順に高くなる。最も比率の高い和語の語形に注目すると、自立用法のない133語は、もとの形態素が「連濁」や「母音交替」などの「変音現象」をおこした「異形態」の集合と言える。133語の中で71語が「異形態」である。

「母音交替」の例

天(アマ)～ 雨(アマ)～ 稲(イナ)～ 酒(サカ)～ 白(シラ)～ 船(フナ)～

「連濁」の例

～顔(ガオ) ～係(ガカリ) ～頭(ガシラ) ～型(ガタ) ～枯れ(ガレ)
～際(ギワ) ～口(グチ) ～繰り(グリ) ～狂い(グルイ) ～越え(ゴエ)

自立用法のない133語は、「前部分」になる29語のうち6語が「母音交替」を起こし、「後部分」になる101語のうち65語が「連濁」を起こしたものである。その他、前後両方の部分になるものが3語あるが、これらには音素の変化はない。この計71語の「異形態」を除外すると、和語においては62語が自立用法のない「造語成分」ということになる。その比率は29.0%で、自立用法のない比率の高さは、和語<漢語<外来語の順に変わる。

漢語(613語)の内、自立用法があるとした278語を個別に検討すると、省略や特殊な場でのみ使用されるものなどが含まれている。例えば、「高・私・使」などの字音語基は、それぞれ単独で用いられる時は、「高一・小中高」「国、公、私」「官、労、使」など、それぞれ「高校」「私立」「使用者」の意味を表している。また、「右・打」などの字音語基は、野球用語として用いられることが多い。これらは、一般には結合専用語基とみなされることの多いものであろう。これらを自立語として辞書の見出し語に立項するかどうかは辞書によって揺れるところである。従って、言語使用の実態からすると、自立用法のない漢語の比率はもっと高くなることが予想される。

「後部分」になる漢語の「造語成分」には、自立用法の有無にかかわら

ず、明確な概念を表す語の省略形として用いられているものが見られる。下に例を挙げた。()内はもとの語形である。これらは略語としてかなり定着しているものであるから、「造語成分」として立項されているのであろう。しかし、これらも辞書により扱いが異なるだろう。

～委(委員・委員会) ～管(管弦楽団) ～響(交響楽団) ～銀(銀行) ～潜(潜水艦)
～研(研究所・研究会・研究室) ～懇(懇親会) ～裁(裁判所)
～労(労働組合)

外来語は漢語の場合と同様に、「後部分」になる自立用法のない「造語成分」には、省略形が多く見られる。また一部「前部分」の「造語成分」にも省略形が出現する。117語中16語が省略形である。「三国」では、省略形の外来語が語形が同じであれば一つの見出し語で括って立項している場合が多い。例えば、「テレ～」は、「テレビ」と「テレホン」の両方の意味を表す。見出し語「～コン」には12に細分された意味が記述されている。以下に省略形の「造語成分」を示す。先に、近年外来語が語構成要素として造語力を発揮していることに触れたが、この省略形がかなり寄与していると思われる。また、以下に示すように、省略形「造語成分」は、2拍のものが多くなっている。このことは、和語や外来語要素を含む略語に、安定した4拍のものが多くなっていることを裏付ける結果と言える⁹⁾。

アメ～(アメリカ) ジャン～(マージャン) テレ～(テレビ/テレホン) ビ
ア～(ビール) ビヤ～(ビール) ポリ～(ポリエチレン/ポリエステル)
～ア(アジア/アメリカ/アフリカ) ～コン(コンクール/コンディショニ
ング/コントロール/コンピューター/コンダクター/コンプレックス/コンサ
ート/コンパ/コンテスト/コンシャス/コンポーネント) ～サラ(サラリー
マン) ～ジャン(ジャンパー) ～タク(タクシー) ～トラ(トラック) ～ド
ラ(ドラマ) ～バイ(オートバイ) ～パン(パンツ/パンティー) ～フィル
(フィルハーモニー)

9) 野村雅昭(1977) p. 258に以下のような記述がある。「和語や洋語要素をふくむ略語には、「なつメロ」「白タク」「内ゲバ」のように、四拍のものがおおい。これは偶然ではなく、二字漢語の平均的な拍数にひかれたものとかんがえられる。」

4-4 品詞性と結合関係

ここでは、「造語成分」の品詞性と結合対象語基との結合関係について分析する。この品詞性と結合関係は、「造語成分」において別個の性格を表すものではなく、いわば表裏をなすものであるが、ここでは分けて分析した。

品詞性は、語種によってその表す意味に違いがあるので、個々に説明を要するが、一応以下に示すように定義し、それぞれの「造語成分」の品詞性を決定した。

- | | |
|-------|---|
| [体言類] | 主に事物の名称を表し、いわゆる名詞に相当するもの。数詞も含める。 |
| [相言類] | 事物の性質や状態を表すもので、形容詞や形容動詞の語幹がそれに当る。 |
| [用言類] | 動作や作用を表し、いわゆる動詞に相当するもの。また動詞の転成名詞や、「する」と結合して動詞になるものも含める。 |
| [その他] | 副詞的や連体詞的なもの。あるいは接辞的で品詞性の決め難いものなどを含む。 |

表5は、「造語成分」を品詞性と構成単位数で分類し、語例を示したものである。全体的には体言類が最も多いが、個別に見ると必ずしもそうではないので、分類枠の大きさは語数の多さを反映するものではない。

和語については、先に示した定義によって品詞を分類することに問題はないが、漢語については、いささか異なる。漢語は、「訓」に置き換えた時の意味や、複合語の語構成分析によって品詞を決めているもので、その字音語基が、そのままで動詞や形容詞として機能するわけではない。外来語についても、元が動詞であれば、状態を表す形容詞的なものや(例：ボイルド～)、「する」と結合してサ変動詞になるもの(例：～ダウン)は、「用言類」に分類した。また、漢語や外来語は一つの語基がいくつかの類にまたがって所属するものもあるが、ここではその代表的と思われる品詞性によって分類している。

表 5 (下線部分が「造語成分」)

体	言	類	相	言	類	用	言	類	その他	
赤恥	今浦島	鬼あざみ	神わざ	草ひばり	粗刻み	荒稽古	大入り	回し読み	生けはまち	うらさびしい
野うさぎ	男滝	雌牛	天かける	金だら	幼友達	早合点	古新聞	色合い	郵便受け	五日余り
からす貝	女神	姫りんご	酒だる	稲作	空景気	ぼろ服	固ねり	親泣かせ	元気づける	共かせぎ
土地柄	横っ面	世間並み	ふた萱	二階家	悪騒ぎ	小利口	長電話	乗りはぐれる	垢じみる	元議員
歌心	小川町	電気周り	花見時	行楽日和	初孫	酒ずき	カー狂	のび盛り	馴れ初める	地獄さながら
食べ頃(ゴロ)	混雑振り	芝居もどき	雪もよい		書きいい	父親そっくり		買い付け	くやしませ	録ぶら
右心室	義兄弟	自意識	地教委	和家具	洋定食	悪天候	暗赤色	環太平洋	減ページ	試運転
後半生	鼻粘膜	左心室	西海	数人	東壁	両氏	閑事業	出エジプト記	省資源	先場所
美容院	岩塩	幼稚園	石油王	日本海	図書館	真犯人	新勢力	市長選	持久走	布装
内角球	成長期	工作機	行政宜	多産系	入場券	等間隔	純日本式	三転	水平動	車中泊
グラススキー	コインランドリー	テレニュース			アメリカンスタイル			フライドチキン		エバグリーン
スノータイヤ	ベビーゴルフ	マイホーム			グッドアイディア			ボイルドエッグ		
ポケットサイズ	キャッチホン	トスワーク			マイクコンピュータ			ポップコーン		
防火デー	ゴールデンアワー	セールスマン			スーパースター			ツードウン		
オリンピックイヤー	マダムキラー	パソコン			ワゴンドール			ラジコン		

	体 言 類	相 言 類	用 言 類	そ の 他
二 単 位 以 上	<p> <u>一つ屋根</u> <u>熱心そのもの</u> <u>屋つ方</u> <u>おかあさんそのまま</u> <u>万年候補</u> <u>連邦捜査局</u> <u>二酸化マンガン</u> <u>十二歳以下</u> <u>百円以上</u> <u>二十日以後</u> <u>5時以前</u> <u>大阪以遠</u> <u>関東以北</u> <u>幕僚監部</u> <u>刃物三昧</u> <u>きみ自身</u> <u>円満居士</u> <u>かたき同土</u> <u>ものの自体</u> <u>のんき坊主</u> <u>かもじ</u> <u>町人風情</u> <u>教育工学</u> </p>	<p> <u>中小河川</u> <u>毛細血管</u> <u>中高年齢層</u> <u>痛快無比</u> <u>馬鹿かわいがり</u> </p>	<p> <u>世間知らず</u> <u>保冷パック</u> </p>	<p> <u>先生</u><u>そこ</u><u>の</u><u>け</u> <u>翌翌号</u> <u>一</u><u>大</u><u>発</u><u>見</u> <u>準</u><u>準</u><u>決</u><u>勝</u> <u>先</u><u>先</u><u>代</u> <u>一</u><u>年</u><u>生</u> <u>十</u><u>周</u><u>年</u> </p>

「造語成分」が、結合対象語基とどのような結合関係を作り得るかは、複合語の語構成分析から判断できる。しかし、ひとつの「造語成分」からは、いくつもの複合語が作られ、それら複合語の語基どうしの結合関係は幾通りかあり得る。従って、その「造語成分」を構成要素にもつ多数の語例を採集し、分析する必要がある。本調査では採集語例が多くないので、ここでの分類は網羅的なものではなく、主な結合関係を示したものにすぎない。以下に結合関係の分類と語例を示す。下線部が「造語成分」である。

連体修飾関係 一方の体言類の語基を他方が修飾している関係のもの。

野うさぎ・新所帯・恋敵・悪天候・石油王・アメフト・革ジャン

連用修飾関係 一方の用言類や相言類の語基を他方が修飾している関係のもの。

はせもどる・回し飲み・斜滑降・乱開発・粗造成・エバーソフト

補足関係 「造語成分」と結合対象語基との関係が、文における格関係に置き換えられるような結び付きのもの。

例えば、外出好き[外出ガ好き]・訪米[米ヲ訪レル]
名刺入れ・情け深い・閉回路・入ソ・要注意・ウォータープルーフ

補助関係 「造語成分」が接辞的で、結合対象語基に形式的な限定を加える関係のもの。接辞的なものでも「前部分」になるものは修飾関係と捉らえることができる。従って、補助関係とするのは、「後部分」になる「造語成分」である。

手つき・混雑ぶり・起きがけ・政治上・植物性・飲み助

以下、「前部分」と「後部分」にわけて語種別にその品詞性と結合関係について述べることにする。なお、ここでは「前後部分」になり得るもの

は除外してある。「前後部分」については、別に述べることにする。

4-4-1 「前部分」になる「造語成分」

表6は、「前部分」になる「造語成分」の品詞性を語種別に分類し、その語数と比率を示したものである。「三国」の外来語の「造語成分」は、先にも述べたように、例えば「～コン」のように、語形が同じなら「コンクール/コントロール」などの意味の異なるものも同一の見出し語にまとめられている場合が多い。そのようなものは、品詞性も一つに決められないので、意味ごとに品詞性を判断した。従って、表の語数はそれらの延べ語数を表す。また表7は、「前部分」の結合関係についての結果を示したものである。

複合語では、統語的あるいは意味的に主要な要素となる語基と、それら主要要素を限定する役割の修飾要素が結合した形のものが多い。それらにおいては、「前部分」が修飾要素、「後部分」が主要要素になる。

和語は「前部分」では、体言類が最も多く、次に相言類が続く。用言類とその他は極端に少ない。その他としたものは連体詞的な「元校長・共裏」や接辞的な「うらさびしい・ほの見える」である。「共」は「共稼ぎ」

表6 <前部分>の品詞性(語数と比率)

	体言類	用言類	相言類	その他	計
和語	32(54.2%)	3(5.1%)	20(33.9%)	4(6.8%)	59(100.0%)
漢語	39(22.5%)	42(24.3%)	59(34.1%)	33(19.1%)	173(100.0%)
外来語	22(26.2%)	3(3.6%)	58(69.0%)	1(1.2%)	84(100.0%)

表7 <前部分>の結合関係(語数と比率)

	連体修飾	連用修飾	補足	補助	計
和語	48(66.7%)	18(25.0%)	6(8.3%)	3(4.2%)	72(100.0%)
漢語	127(71.0%)	24(13.4%)	28(15.6%)	1(0.6%)	179(100.0%)
外来語	82(96.4%)	1(1.2%)	2(2.4%)	0(0.0%)	85(100.0%)

では副詞的とも言える。用言類は「回し飲み・生け鯛・はせもどる」である。

「前部分」は、修飾要素になる場合が多いので体言・相言の比率が高くなるのは当然であろう。体言類のものを意味の面から見ると、自立用法がある「造語成分」の中で、「姫鏡台・赤恥・鬼検事・からす貝・草野球」などは、比喩的な意味で用いられているもので、自立用法の意味から離れ、転義して「造語成分」として機能していると言える。またこれらの中でも「姫～・赤～」と「鬼～・からす～・草～」では、前者は比喩的と言っても元の意味をほとんど残していないのに対し、後者は「鬼のような～・からすのような～」などに置き換えられる場合もあり、自立用法との意味の差という点では違いがある。しかし、いくつもの意味を持つ多義の「造語成分」においては、意味によって自立用法との差は異なると思われるので、語義に立ち入った分析は、「造語成分」ごとの個別の検討を要することである。また「犬侍・犬死に」における「犬～」は、「三国」では接頭語とされているが、先の「鬼・からす」などとの違いは明らかではない。

結合関係では、連体修飾関係は「造語成分」の品詞性を問わず作り得るので、比率も最も高くなっている。また、相言類が比較的多いことから、例えば「粗刻み・大騒ぎ・早合点・悪酔い」など連用修飾関係を作るものも25%ある。補足関係は「天下り(天カラ下ル)・雨宿り(雨デ宿ル)・稲作(稲ヲ作ル)・酒太り(酒デ太ル)・金縛り(金デ縛ル)・神しずまる(神ガ鎮マル)」などである。

漢語の品詞性分類では、相言類>用言類>体言類>その他 の順で比率が高い。相言類が34%余りを占めるが、和語のように極端に少ない類はない。相言類と体言類で60%近くになり、そのために結合関係でも連体修飾が70%以上を占める。連用修飾関係をなすものは、「追試験・続出・誤診」などの用言類、「重労働・猛反対・微修正」などの相言類、そして「既発表・最接近・再確認」などのその他である。「三国」では「続～」

「誤～」が「造語成分」として立項されているが、語例は先に挙げたように二字漢語である。二字漢語を構成する結合専用語基を「造語成分」とするなら、他にも多数立項されるはずである。しかし、このように二字漢語の例しか示されていないものは、省略形を除くと非常に少ない。「誤～」は「誤投下」などの例もあるので、「造語成分」とすることに問題はないのであるが、「続～」のような例は、「三国」がどのような字音語基を「造語成分」と捉らえているのかという点について疑問を感じさせるものである。

用言類の「造語成分」は、補足関係を作るものが多く見られる。例えば「沿日本海域・帰英・抗ガン剤・在東京・殺ダニ剤・出エジプト記」などである。

漢語には、「前部分」になる「造語成分」の中で、「一大発見・一昨年度・再再引き上げ・中小河川」などのように構成単位数が二単位以上のものが26語ある。これらは、品詞性では連体詞的なものが多い。「再来期・先先月・前前日・翌翌日・来来期・一昨昨年」など、時を表す結合対象語基を限定する働きのものである。また「一大発見・一両日・三大会社・三連戦・四半世紀・十数人・二大政党・両三度」など構成要素に数詞を含むものが多く見られる。

外来語は、先にも述べたように和語や漢語と異なり「前部分」になるものが多数を占める。その中で、相言類と体言類が大部分を占め、連体修飾関係が96%に達している。用言類とした「フライドチキン・ボイルドエッグ」も、状態を表す形容詞的なものである。その他としたものは、「エバーグリーン / エバーソフト」の「エバー」1語で、これが連用修飾関係を作る。補足関係は「セルフトレーニング・アッパーカット」である。先に、外来語が語の構成要素として造語力を高めて来ていることを述べたが、「造語成分」においては、連体修飾になる成分として名詞と結合し、複合名詞を作る場合がほとんどで、造語機能は限定されていると言える。

4-4-2 「後部分」になる「造語成分」

表8と表9は、「後部分」になる「造語成分」について、その品詞性と

表 8 〈後部分〉の品詞性(語数と比率)

	体言類	用言類	相言類	その他	計
和 語	59(38.6%)	79(51.6%)	10(6.5%)	5(3.3%)	153(100.0%)
漢 語	369(89.2%)	39(9.4%)	1(0.2%)	5(1.2%)	414(100.0%)
外来語	28(87.5%)	3(9.4%)	1(3.1%)	0(0.0%)	32(100.0%)

表 9 〈後部分〉の結合関係(語数と比率)

	連体修飾	連用修飾	補 足	補 助	計
和 語	51(30.9%)	8(4.8%)	77(46.7%)	29(17.6%)	165(100.0%)
漢 語	349(81.7%)	20(4.7%)	41(9.6%)	17(4.0%)	427(100.0%)
外来語	29(87.9%)	0(0.0%)	4(12.1%)	0(0.0%)	33(100.0%)

結合関係を分類し、それぞれ語数と比率を示したものである。

和語の「後部分」は、「前部分」と異なり、用言類が体言類をしのいで半数以上を占めている。但し、この用言類は動詞からの転成名詞を多数含んでいる。従って、それらの「造語成分」は複合名詞を構成するもので、純粹に動詞として複合動詞を構成するものは、「舞い納める・やりおおせる・言いさす・気違いじみる・言いそびれる・知りそめる・調子づく・位置づける・たたきのめす」(下線部分が「造語成分」)など比較的少ない。その他「する」を伴ってサ変動詞になるものが「網焼き・ゴルフ焼け・霜枯れ・女狂い・とがめだて・のりづけ・化粧ばえ・大蔵省詣で」などである。

このように用言類が多いことから、結合関係は結合対象語基と補足関係をなすものが多くなっている。

その他としたものには、「銀ぶら」の「ぶら」のように判断に迷うものや、「思い出しついで・先生そこのけ・おかあさんそのまま」など、語のレベルを越えているようで、語構成要素と言えるのか検討を要するものもある。

また、用言類に分類したものの中にも、「顔つき・買い付け・乗りはぐれる・勝ちっぱなし」など本義から離れた意味で使われるものがある。これらは「造語成分」として語構成にあずかる時にのみ生まれる意味と考えられる。このような「造語成分」がある一方で、大部分のものは元の語基の中心的意味をそのまま残している。「造語成分」を意味の面から見ると、本義そのままのもの、「造語成分」として独自の意味を表すものなどが混在しているようである。

漢語は、「前部分」に極端な偏りがなかったのに対し、「後部分」では90%近くが体言類で占められている。また、体言類としたものの中には、「大阪以遠・明治以降・十日以内・太り気味」など複数の構成要素からなるものも含まれている。相言類としたものは、「痛快無比」の一語である。その他は、「三周忌・十周年・五層楼・一年生・一年有余」である。これらは数詞と結合する助数詞的なものである。結合関係は、連体修飾が80%以上を占める。補足関係としたものは、「深夜勤・風力計・テトロン混・春作・日本産・北東進・細胞診・小田原以西・関東以北」など10%程ある。連用修飾関係を作るものは、「一巡・三勝・三訂版・二転三転・第二登・第一投」など用言類の「造語成分」であるが、これらは数詞と結合して助数詞的な使われ方をしているものである。補助関係には、「植木屋 / お天気屋・ラッセル卿・だんな衆・世界中・可能性・いなか風・わたくし風情・直し様がない・秘密裏に脱出」など接辞的と思われるものを分類したが、それほど厳密なものではない。

外来語の「前部分」は、相言類が最も多かったが、「後部分」では体言類が圧倒的に多く、87.5%を占め、結合関係も87.9%が連体修飾関係である。

用言類とした「ツーダウン・ノーダン」の2語はともに「down」を表し、野球において「アウト」の意味で使われる場合の用法である。「ダウン」は「名詞 / サ変動詞」になる自立語として見出し語になっている。結合形式の「造語成分」として使われる時は、意味が限定あるいは転義する

例と言える。相言類は「ワゴンドール」1語である。「金の～」という意味のフランス語「d'or」である。

結合関係は連体修飾関係と補足関係を作るものだけで、「巨人キラ・脱サラ・ホテルジャック・ウォータープルーフ」が補足関係である。

4-4-3 「前後部分」

「前後部分」になる「造語成分」は、下に示した下線部分の32語である。

「前後部分」になるものは、圧倒的に漢語が多く、造語力の強さを示している。意味の面から見ると、前後で異なる場合と共通する場合がある。例えば、漢語の「生」は「前部分」になる時は「生石灰」のように「なま」の意味を表すが、「後部分」では、「なま」の意味はなくなる。「名」も「名選手」では「優れた、有名な」の意味であるが、「後部分」になる時は、これらの意味で使われることはないと言ってよいだろう。共通するものは多いが、前後で品詞性が異なる場合がある。例えば、「深呼吸」は「深く呼吸スル」または「深イ呼吸」で相言類と考えられ、連用修飾関係または連体修飾関係を作ると言える。しかし、「積雪深」は「積雪ノ深サ」となり、体言類で連体修飾関係を作る。また「超満員・超うまい」などは副詞的でここでの分類に従うとその他となるが、「二千円超」では動詞的

- | | | | |
|-----------------------------------|--------------------------------------|----------------------------------|----------------------------------|
| 1 <u>立</u> て看板・洗 <u>い立</u> て | 2 <u>安</u> 月給・五円 <u>安</u> | 3 <u>下</u> 意義・インフ <u>レ下</u> | 4 <u>休</u> 火山・四週五 <u>休</u> 制 |
| 5 原住民・火口 <u>原</u> | 6 <u>主</u> 成分・りんご園 <u>主</u> | 7 <u>初</u> 対面・明治 <u>初</u> | 8 <u>女</u> 店員・修道 <u>女</u> |
| 9 <u>上</u> 機嫌・政治 <u>上</u> の問題 | 10 <u>深</u> 呼吸・積雪 <u>深</u> | 11 <u>親</u> 中国派・尊属 <u>親</u> | 12 <u>製</u> パン・鋼鉄 <u>製</u> |
| 13 <u>生</u> 石灰・研究生 | 14 <u>前</u> 校長・戦争 <u>前</u> | 15 <u>帯</u> 紅色・時間 <u>帯</u> | 16 <u>大</u> 暴落・等身 <u>大</u> |
| 17 <u>短</u> 時間・栄養 <u>短</u> (短期大学) | 18 <u>超</u> 高速・二 <u>千</u> 円 <u>超</u> | 19 <u>長</u> 時間・書記 <u>長</u> | 20 <u>豚</u> カツ・養 <u>豚</u> |
| 21 <u>内</u> 出血・区 <u>域内</u> | 22 <u>南</u> 軍・肉 <u>南</u> (肉なんばん) | 23 <u>難</u> 事業・資金 <u>難</u> | 24 <u>農</u> 作業・自作 <u>農</u> |
| 25 <u>馬</u> 体・対抗 <u>馬</u> | 26 <u>美</u> 少年・健康 <u>美</u> | 27 <u>病</u> 詩人・胃腸 <u>病</u> | 28 <u>分</u> 工場・増加 <u>分</u> |
| 29 <u>名</u> 投手・学校 <u>名</u> | 30 <u>連</u> 安打・県 <u>連</u> (県連合会) | 31 <u>オ</u> ール日本・スリ <u>ー</u> オール | 32 <u>タ</u> ウン情報・ニュー <u>タ</u> ウン |

で用言類になり、「二千元ヲ超エル」で補足関係を作ると言える。「前部分」でも「超党派」などは用言類で補足関係と言えよう。

前後で意味の異なるものには、「後部分」が省略形のものがある。「栄養短(短期大学)・肉南(なんばん)・県連(連合会)」などである。

5. 「造語成分」の性格

5-1 「三省堂国語辞典第4版」の「造語成分」

以上、「三省堂国語辞典」に出現する「造語成分」について、語種別に調査してきた。ここでは、その調査結果をまとめてみることにする。

- ① 「造語成分」を語種の点から分類すると、「後部分」と「前後部分」ではその占める割合は、ともに「漢語>和語>外来語」の順であるが、「前部分」では外来語と和語の順が入れ替わる。「三国」においては、外来語が「造語成分」としてかなり積極的に収録されていると言える。
- ② 構成単位数から見ると、一単位のものが圧倒的に多いが、二単位以上のものも6%余りあり、特に漢語に多く見られる。形態的には多様であるが、それらの中には、結合対象語基と合成される単位が、「語」のレベルを越えていると思われるものもある。
- ③ 「三国」の「造語成分」は、「単語と結びつく、接頭語・接尾語に近いもの」と約束されているが、語種別に見ても、それぞれ40%前後のものが、その自立性には程度差があるものの、一応自立用法を持っている。従って、「造語成分」は必ずしも「結合形式」を意味するものではないことになる。また、自立用法のない比率は「漢語<外来語<和語」の順に高くなる。和語の比率が高いのは、もとの形態素が「連濁」や「母音交替」などの「変音現象」を起こした「異形態」が、多数含まれていることによる。
- ④ 「後部分」になる漢語と外来語には、省略形が多く見られる。また、外来語には、「前部分」になるものにも省略形が出現し、これら省略

形が、外来語の造語力の向上に寄与していると考えられる。

- ⑤ 和語は、「前部分」では体言類が最も多く、相言類がそれに次ぐ。用言類とその他は極端に少ない。結合関係も連体修飾が多く、相言類が比較的多く出現することから、連体修飾も20%余りある。「後部分」では、用言類が最も多くなり、結合関係も補足関係が半数近くを占める。
- ⑥ 「前部分」になる漢語は、品詞性に極端な偏りが無い。また連体詞的なものには、二単位以上のものが比較的多い。「後部分」は体言類が圧倒的に多く、「前部分」とは異なる。結合関係は前後ともに連体修飾関係が多くなっている。
- ⑦ 外来語は、「前部分」になるものが多く、「後部分」になるものが多い。和語や漢語とは異なっている。品詞性では、相言類が70%近くを占め、次に体言類が続く。結合関係も97%近くが連体修飾関係で、造語機能は単純なものと言えよう。
- ⑧ 意味の面から「造語成分」を見ると、語基としての本来の意味を表すもの、転義して合成語の意味を支えるもの、またほとんど形式的な意味しか持たないものなど、いくつかの段階が想定される。

次に、「三省堂国語辞典」の「造語成分」について、問題と言える点を以下にまとめてみた。

- ① 和語の「造語成分」として、「～そのまま・～そのけ」が出現するが、これらは「語」を造る成分と言えるのか。「おかあさんそっくりそのままだ。」「先生もそのけだ。」など、間に他の要素が入り込む余地があるのではないか。
- ② 「造語成分」と「接辞」の区別が明確ではない。比喩的な意味で用いられる「鬼～(鬼検事)・姫～(姫ゆり)」などは「造語成分」であるが、同じく比喩的な意味を表す「犬～(犬侍)」は「接辞」になっている。また「古～・旧～」が「造語成分」で、「亡～・故～」が「接辞」であるのはなぜか。固有名詞に接続するものは「接辞」としているの

か。しかし、「亡祖父」など「亡～」は、固有名詞よりむしろ普通名詞と結合することが多いのではないか。どのような基準で「造語成分」と「接辞」を区別しているのかははっきりしない例である。

- ③ 和語において、動詞や形容詞の語幹、また動詞の転成名詞は造語力のある語構成要素として、多くの合成語の形成にかかわる。しかし、「三国」の「造語成分」においては、その一部が出現するだけである。「回し～(回しのみ)」は、名詞「回し」の項に「造語成分」の記述が見えるが、「立ち～(立ちのみ)」については、「立ち」という自立語がないため、記述されていない。国語辞典において動詞・形容詞は、終止形で見出し語になるので、これら語幹の「造語成分」は、記述されずに済まされることが多いのかと思う。しかし、結合形式の語構成要素を考える上では、これら動詞や形容詞は重要な研究対象と言える。

5-2 語の構成要素としての「造語成分」

以上述べたように、国語辞典で扱われている「造語成分」を、いくつかの観点から調査分析することによって、その性格を多少なりとも明らかにすることができたと思う。ここで、この「造語成分」が、語の構成要素としてどのように位置づけられるかを考えてみたい。

小稿の冒頭で述べたように、語の構成要素である形態素は、単独で語を構成できるかできないかによって、自立形式と結合形式とに分けられ、合成語の意味を担う役割の軽重によって、語基と接辞とに分けられる。この二つの分類において、「造語成分」はどのように位置づけられるのか。

- (a) まず、最初に挙げられる「造語成分」は、結合形式の語基グループである。これらは、自立形式の語基と同様に明確な意味を表す語基である。しかし、他の要素と結合することによってのみ語の形成に関わるという意味において、最も「造語成分」らしいものである。本調査では、945語の中で、自立用法のない465語(49.2%)がこのグループに属する。

- (b) 次に、自立形式の結合形式化による「造語成分」が挙げられる。

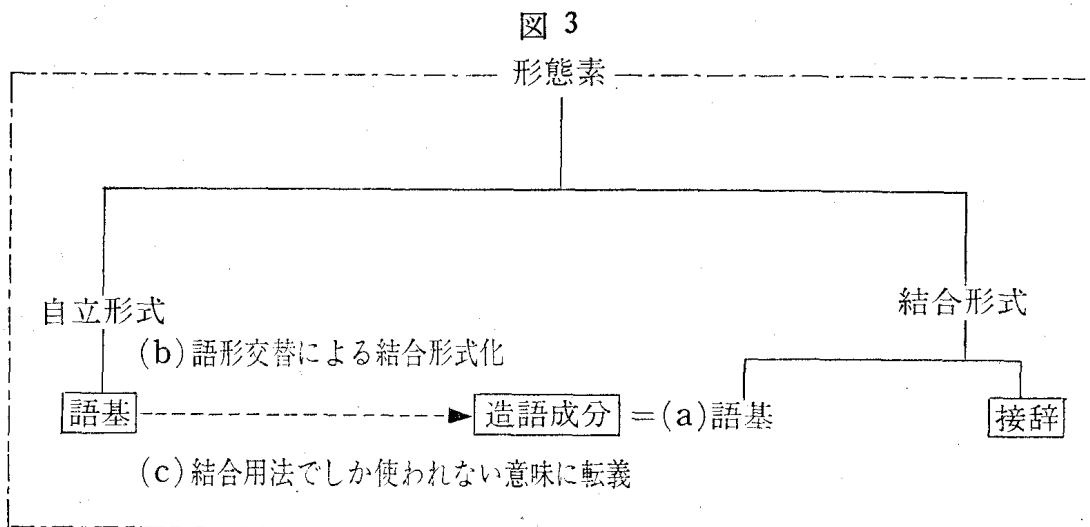
これは、本来自立形式である形態素(語基)が、連濁や母音交替などの変音現象によって、語形交替を起こし、結合形式化した結果「造語成分」として扱われているものである。

- (c) さらに、自立形式の語基が、本来の自立用法での意味から離れた、結合用法においてのみ使われる意味を有するようになって、「造語成分」として機能する場合がある。例えば、本調査でもいくつか出現したような「姫～・草～・からす～」などの比喩的意味を表すものなどが、その代表である。

以上述べたことを簡単に図示したものが、下の図3である。

図3は、結合形式の語基を純粋な「造語成分」とし、自立形式の語基を(b)や(c)の場合に「造語成分化」する、すなわち「造語成分」としての扱いを受けるようになると考え、「造語成分」を自立形式の語基と接辞の中間に位置するものと捉えていることを示している。しかし、実際は、(c)においても転義の度合いに段階が想定できるし、自立形式の語基の造語成分化にも他の要因があり得る。それを明らかにするためには、国語辞典において、どのような語基が「造語成分」として扱われるようになっているかを通時的な観点から調べることも必要となろう。

また、「造語成分」の語構成要素としての位置づけをするためには、接



辞との相違が明確にされる必要もある。その意味では、図3は、本調査を通して得られた、語構成要素についての一つの見取り図を示したものにすぎない。

6. おわりに

小稿では、結合形式である語の構成要素にはどのようなものがあり、どのような性格を持つのかということを調べるために、一種類の国語辞典を取り上げ、「造語成分」に焦点を絞り分析した。本来なら数種類の国語辞典を調査対象とし、それらの比較を通して分析が進められるべきものだが、それは果たせなかった。今後の課題としたい。また、調査対象が語の構成要素として、かなり性格の異なる和語・漢語・外来語の三種にまたがったため、論を深めることができず、それぞれを概観するに留まった。

今後の課題としては、国語辞典を資料とした「造語成分」の調査をさらに深めるとともに、結合形式の中心とも言うべき「接辞」についての分析を進め、自立形式と結合形式、そして語基と接辞とに対立されている語構成要素の枠組みを再考したいと思う。

参考文献

- 石井正彦 (1989) 「語構成」(『講座日本語』と日本語教育 6 日本語の語彙と意味(上)) 明治書院)
- 影山太郎 (1989) 「形態論・語形成論」(『講座日本語と日本語教育 11 言語学要説(上)) 明治書院)
- 国立国語研究所 (1958) 『総合雑誌の用語—後編』(国語研報告 13 秀英出版)
- 国立国語研究所 (1964) 『現代雑誌九十種の用語用字 III 分析』(国語研報告 25 秀英出版)
- 国立国語研究所 (1972) 『電子計算機による新聞の語彙調査 (III)』(国語研報告 42 秀英出版)
- 国立国語研究所 (1976) 『現代新聞の漢字』(国語研報告 56 秀英出版)
- 斎賀秀夫 (1957) 「語構成の特質」(『講座現代国語学 II ことばの体系』筑摩書房)
- 斎藤倫明 (1984) 「複合動詞構成要素の意味——単独用法との比較を通して——」(『国語語彙史の研究 5』和泉書院)

- さねとうけいしゅう (1973) 『近代日中交渉史話』(春秋社)
- 玉村文郎 (1985) 『語彙の研究と教育(下)』(国立国語研究所)
- 野村雅昭 (1977) 「造語法」(『岩波講座日本語 9 語彙と意味』)
- 野村雅昭 (1979) 「接辞性字音語基の性格」(『電子計算機による国語研究 IX』国語研報告 61 秀英出版)
- 野村雅昭 (1982) 「新語辞典の外来語」(『言語生活』366 筑摩書房)
- 野村雅昭 (1984) 「語種と造語力」(『日本語学』3-9 明治書院)
- 服部四郎 (1960) 『言語学の方法』(岩波書店)
- 宮地 裕 (1978) 「モーフ (morph) の論」(『論集日本文学・日本語 5 現代』角川書店)
- 森岡健二 (1969~1970) 「日本文法体系論(8)~(14)」(『月刊 文法』明治書院)
- 森岡健二 (1985) 「外来語の派生語彙」(『日本語学』Vol. 4 明治書院)
- 森田いずみ (1993) 「客体から主体へ——外来語への意味構造分析的アプローチ——」(『国語学』175)
- 森田良行 (1978) 「日本語の複合動詞について」(『講座日本語教育』14 → 『日本語学と日本語教育』1990 凡人社に収録)
- 山下喜代 (1993) 「日本語教科書における『接辞的漢語』」(『早稲田日本語研究』創刊号)